



難しい言葉（その4, 総集?）

●美咽科医師会会員
雨田 実

身の程をかえり見ないで雑文を再三にわたって綴らせて頂いたところ、道歯会の先生がたから意外と思う程のご指導とか、問い合わせやら頂きましたことは誠にありがたいことで、謹んで感謝を申し上げる次第でございます。色々な関係資料を調べたり、多くの貴重なご意見を伺えば何う程、分かったことと同じ位に疑問や分からないことが多く出てきて益々わからなくなり、困惑の度合いは深まるばかりで「事件に行き詰まった時は原点に戻れ」の鉄則に従って復習してみることにする。

初め、小股の切れ上がった女性とは、女の背のすらりと高いをいう。辞書『大言海』から始まり、もと遊里の老やり手の言葉として、おいらん道中における一流の大夫が、その気品と女らしさを失うことなく大股で外八文字に踏み切れるように道中をこなせるようなお職の大夫級になると、小股が切れ上がるとのこと。女性が内輪うちわに（つまさきを合わせるように歩くこと）立つ場合に、かかとは離れるため股は切れ上がるとの説。「小首をかしげる」「小耳にはさむ」というけれど、元来小首も小耳もないものと同じように、小股の小はないもので、すこしとか一寸ちよっとという意味を言い、小股の場合は切れ上がったという言葉に意味があるという意見。小股とは目尻の切れ長で妖艶ようえんな女という意で、わかりよくて好都合なためか根強い多数の支持がある。まなこ、と呼べることとか流し目、

秋波しゅうはなどとも関連があるらしい。小股こまたを襟足えりあしと解し、襟足の切れ込みの深い美人との異色解釈もある。

民俗学者で『遠野物語』で名高い柳田國男氏説を伝承した一流の洋画家の伊原宇三郎氏のご意見では、小股は現実にあるもので鼠蹊部そけいぶの作る線がそれで、その角度が鋭角であることが切れ上がったと言われる条件であり、衣服の上からでも立居たちい振舞ふるまいの折に十分に伺い知ることができる。グラマーの流行なぞなかった江戸時代に、厚着の女性など江戸っ子の眼がねにかなわなかったのではと言っており、この言葉は通人つうじんの言いだしたもので、女性に対して露骨な気品を欠く如き直線的な表現でない意味深長な言葉でしょうと柳田先生は言われていたとのことである。薄着の柳腰の美人で、背のすらりと高い色の白い髪かみは鳥かすの濡羽色ぬぼいろとなるようであるが、すべての解釈が大きく変わっている現代に皆が素直にうなずいてくれるか疑問は尽きない。さらに伊原氏は柳田先生のご意見を整理しているうちに、下腹部が細く締まっていることが絶対的条件で、下腹部が締まっていれば誰でも小股は切れ上がりますと言いつつも「顔は別ですが」とことわっている。20代初めの頃に小股の切れ上がった水もしたたるような美人と言われた人でも、30代になって下腹部に脂肪がついて太ってしまえば、もう小股の切れ上がった美人とは誰も

言ってくれないでしょうとも言っている。雑誌芸能で奥野信太郎・戸板康二両氏の対談で、花柳章太郎評の時奥野氏が花柳を絶賛し、小股の切れ上がった女と評していました。戸板氏が「小股って何だろう」と質問すると、奥野氏は「小股の小は小耳はきに挟む、小面こづらに憎い、の小で意味はなく、足捌あしはききの活々と敏捷びんしょう」と説明しています。花柳の女形には随分沢山のほめ言葉を贈ることが出来ますが、私は柳田先生のお話を伺って以来、小股のほうだけは体質的に失格と見ています。尾上梅幸も同然で、歌右衛門の方は合格。もし花柳が粹で小股の切れ上がった感をよく出したら、それは体つきではなく芸の力だと思います。私はあの太きとしまがその故にいつも邪魔になります。色は年増としまに止めをさす。女盛おんなざかり、手練てれん、手管てくだ、秋波あきなみなどいろいろあって、小股万能とはいかないと思いますとも言っている。この柳田氏伝承の伊原氏説は、大学教授で文学博士の池田弥三郎氏がそれまでの自説をくつがえして従っただけのもので、小股説の中ではさすがに目立つものといえることは確かであるが。もう少し同意見どういけんが欲しいとはいなめない。要するに問題を大別すると目尻説、襟足説は別として、小股云々を直接局部付近に関連して解釈するか、より広く脚部全体について言ったものとするか、その2点につきます。その外に古川柳研究家岡田甫氏主筆の近世庶民文化誌があって、とりわけ昭和37年6月号には4篇の特集をこの話題で組んでおり、他にも第10・11・79・82・85号にも関連寄稿があるが、それでも甲論、乙説十指に余り、足指を加えても際限がないので、最後に岡田氏自身が

小股私見の一文で一応の打ち切りを宣している。これらのことで改めて教えられたのは、どうやらこの言葉が広く口の端にのぼるようになったのは、岡田氏が言われるには明治以降のことらしく、江戸期での文献用例には意外にとほしいと言う。山東京伝とうきょうでん、太田南畝なんび、平賀源内へいがげん、榎本其角えのきかく、加藤千蔭かとうちかげ、加茂真淵かものまぶち、与謝蕪村よせうそむら、荻生徂徠おぎゅうそらい、漢詩、俳諧、狂歌きやうか、黄表紙わうひょうし、滑稽本こっけいほん、読本よみほんなどの著者にこと欠かなかった、風雅の交わりの華やかな江戸時代の文献用例に不思議と見られなかったという。とにかく厄介な言葉のようである。難しい言葉として再三にわたって雑文を綴り、今回こそ総集という形で結論といえないまでも、ある程度はまとめとすべく綴れば綴るほど、この言葉の奥の深さに疑問がますます多くなって、正に大風呂敷を拡げたままになってしまい、ただただ赤面の限りで申し訳なく存じます。幾分でも諸先生方の雑学の足しにでもなればと、こい願うばかりでございます。陳謝。

